

平成 29 年 5 月 6 日(土)の京都新聞に
宇治武田病院 整形外科 脊椎センター
齋藤センター長の記事が掲載されました。

やましろ

医療



宇治武田病院

齋藤 令馬氏

脊柱管狭窄症と診断されました

Q 最近、歩き難くなりました。整形外科で脊柱管狭窄症と言われましたが、今後どうしたら良いのでしょうか。

A

神経の通り道（脊柱管）が狭くなり神経が圧迫される事を脊柱管狭窄症といい、基本的に年齢的な変形が原因となります。腰椎の場合は腰部脊柱管狭窄症と呼ばれ、下肢のしびれ感、痛み、力が入らない（麻痺）といった症状が見られます。少し歩くと下肢がしびれ痛くなり、少し休むとまた歩けるようになる症状は、10年たっても9割の人が続くと言われています。一方、安静時の下肢痛は数カ月間程度で治りやすい傾向にあります。頸椎の場合は頸椎症性脊髄症と呼ばれ、上肢のしびれ感、痛み、麻痺あるいは歩行障害が見られます。箸・書字・ボタンかけといった細かい作業が難しくなったり、まっすぐ歩き難くなったりする症状は徐々に悪くなりがちで自然には治り難いのですが、上肢の痛みが主体の時は数カ月間で治りやすいとされています。

診断にはエックス線、MRI（磁気共鳴画像装置）、CT（コンピュータ断層撮影）などの検査が用いられますが、症状の経過や詳細な診察が欠かせません。

まず保存療法で痛み抑えて

治療としては、まずは保存療法が一般的で、痛みを抑える薬や神経の血流を改善する薬や神経ブロックなどが行われます。

日常生活が困難な場合、悪くなっていく場合、長期間かけても治らない場合には、手術療法を検討します。手術では神経の圧迫を取り除いたり、骨を固定したりしますが、筋肉を温存した低侵襲手術が行われますので、術翌日から歩行可能で長期入院は必要としません。保存療法を長々と行っても症状が良くならない場合は、神経が変性して回復が難しくなることがあります。治療は適応とタイミングが大事ですので、脊椎専門医とよく相談して今後の治療計画を考える必要があります。

（整形外科）

〓おわり